

水 小 夜
寺 澤 琴 風

[其百卅三]

「何うしていけないのだ」
牧島が横合から火のつこやうにがなつた、けれども米は飽きでも冷やかに

「私は貴方に申上げてゐるのであらまきん」

「なにを！」
隠しきつけかねまじき涙腺で牧島が突立上ると、陽吉は慌ててそれを支へた。

「お水さん許してくれ玉へ、此の男は酔ふと斯うした病のある男だから」

「管らぬことを言ふな」

「まだ高い」

牧島が倒しながら陽吉は

「どうして船をこよへ呼ぶこそが出来ないのか、その理由を聞けばそれでいいんだ」

「お水さんは唯今

向ふの座敷にわざわざ客をして居りますから」

「さうや口實だ

牧島は又がな立てた。

「さうですか、ちやはつき申しませう、お歸り

怪しからん奴だ

生意氣な

牧島が又も立

上り、陽吉はいつになく落

附さに頭を下げる

來るのは娘だぞ

申して居りますから」

「さうですか、ちやはつき申しませう、お歸り

怪しからん奴だ

生意氣な

牧島が又も立

上り、陽吉はいつになく落

附さに頭を下げる

來るのは娘だぞ

申して居りますから

怪しからん奴だ

生意氣な

<p